

ホソアオゲイトウやアオゲイトウに紛れて増加？

# イガホビユ

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 技術顧問  
森田 弘彦

*Amaranthus powellii* S. Watson (英語名: Powell's amaranth, redroot, smooth pigweed, 他)。ヒユ科 ヒユ属  
日本で見られる 15 種ほどのヒユ属植物の多くは畑作などでの厄介な帰化雑草である。これらの植物では花が小さく、地味であることから判別しにくい群であるが、同定の情報が整理されて(勝山 1998)以降、それまで目立たなかったイガホビユがホソアオゲイトウ(*A. hybridus*)やアオゲイトウ(*A. retroflexus*)などから正確に識別されるようになった。その結果、「ウチにあるのはイガホビユの方」との認識(石川・白木 2012)が増えつつあるので、お近くのダイズ畑などのヒユ属雑草も見直してはいかがでしょうか(図-1)。

■分布

アメリカ合衆国南西部からメキシコにかけての地域の実原産で、カナダを含む北アメリカ、ヨーロッパやオセアニアに帰化して農耕地の雑草になっている(eFloras 2008; Randall 2002)。日本では、1968年に静岡県清水市で採集された標本が*A. powellii*と同定されて「イガホビユ」の和名が付された(杉本 1969)。勝山(1998)は、「1937年に原寛がホソアオゲイトウ:*A. hybridus*と記載した植物に同定されたものの一部は*A. powellii*で、現在では*A. hybridus*の学名はホソアオゲイトウに該当する。」と整理した。イガホビユは帰化植物としてほぼ全国に分布するとされる。

■形態と見分けるポイント

刺のない茎が直立して高さ1m以上に育ち、完全花からなる花穂を着ける(雌雄異株ではない)などの点で類似するアオゲイトウおよびホソアオゲイトウとは以下の検索表(勝山 1998)でイガホビユを識別できる。

- A: 花被片は胞果よりも著しく長く、上部が幅広いさじ形  
.....アオゲイトウ
- A: 花被片は胞果と同長またはやや短く、さじ形ではない.....B
- B: 葉は菱形で上面は濃緑色、下面は緑白色、花序はあまり枝を分けず、ほとんど無毛、小苞は花被の2倍長、種子は直径1.1mm.....イガホビユ
- B: 葉は卵形で両面ともに緑色、花序は斜上する多くの枝を分け、有毛、小苞は花被の1.5倍長、種子は直径0.9~1mm  
.....ホソアオゲイトウ

ごく類似するホソアオゲイトウとの識別には、花序の出現後に小花や小苞の確認を要するが、慣れれば茎葉の毛の状態でもわかる(図-2)。「・・・花序の苞は先が針のように鋭く、触れると刺す感がある(筆者注:乾燥標本であろう)・・・穂の苞をクリのイガになぞらえて、イガホビユと名づける。(杉本 1969)」とあるように、花穂に特徴がある。

■雑草としての情報

石川・白木(2012)は、北海道で畑作の問題雑草とされてきたヒユ類であるイヌビユとアオビユに対して、北海道農業研究センター芽室拠点(河西郡芽室町)に発生する種をイガホビユと同定した。イガホビユは、アオゲイトウやホソアオゲイトウより早く開花し、また、6月18日に出芽した個体は無施肥で約15,500の種子を生産し、種子量はダイズ、バレイショ用肥料の施用で増加し、テンサイ用肥料では約192,500に達した(石川・白木 2012)。

2017年に日植調協会により実施された「畑作・草地飼料



図-1 成熟期のダイズ圃場に  
残存するイガホビユ  
(2012年, 秋田県三種町)



図-2 イガホビユとホソアオゲイトウの形態  
1: 開花期の全形,  
2: 花穂の一部 3: 茎の一部

作除草剤・生育調節剤の適用性試験」では、イガホビユは北海道(北見)と新潟県で出現した。他のヒユ属雑草としては、ホソアオゲイトウ: 山形県, 宮城県, 兵庫県, 福岡県, アオゲイトウ: 北海道(長沼), アオビユ(ホソアオゲイトウ): 北海道(十勝), 兵庫県, 沖縄県, イヌビユ: 宮城県, 長野県, 兵庫県, ハリビユ: 鹿児島県, が試験圃場で記録された。「一般に認識されていないために、報告は少ないが、神奈川県ではアオゲイトウよりも多くみられる。(勝山 1998)」と指摘されてから、各地で確認され始めた。

■防除に関する情報

北海道の畑輪作体系でイガホビユを総合的に防除するために、土壌処理除草剤として同時処理を含むダイズ用3種, バレイショ用5種および茎葉処理剤としてダイズ用2種, 同時処理を含むテンサイ用5種, コムギ用3種の除草効果が調べられ、効果の高い剤が選定された(石川ら 2014)。機械除草や生態的防除手段と合わせて、本種の総合的防除法の確立が取り組まれている。

上記のように、植調協会の新除草剤適用性試験で「イガホビユ」を対象雑草とした試験成績が蓄積されれば、防除に関する情報が豊富になる。複数の種が含まれる畑作のヒユ属雑草の中で、イガホビユを正確に認識して、雑草制御技術の精度向上につなげることが期待される。

■参考文献

eFloras 2008. Flora of North America, <http://www.efloras.org>  
Missouri Botanical Garden, St. Louis, MO & Harvard University Herbaria, Cambridge, MA [アクセス確認: 2018年2月6日].  
石川津枝子・白木一英 2012. 育種・作物学会北海道談話会報 53: 47-48.  
石川津枝子ら 2014. 育種・作物学会北海道談話会報 55: 85-86.  
勝山輝男 1998. FLORA KANAGAWA 47, 524-529.  
Randall, R.P. 2002. A GLOBAL COMPENDIUM of WEEDS, R.G. and F.J. Richardson, Melbourne.  
杉本順一 1969. 植物採集ニュース 44.